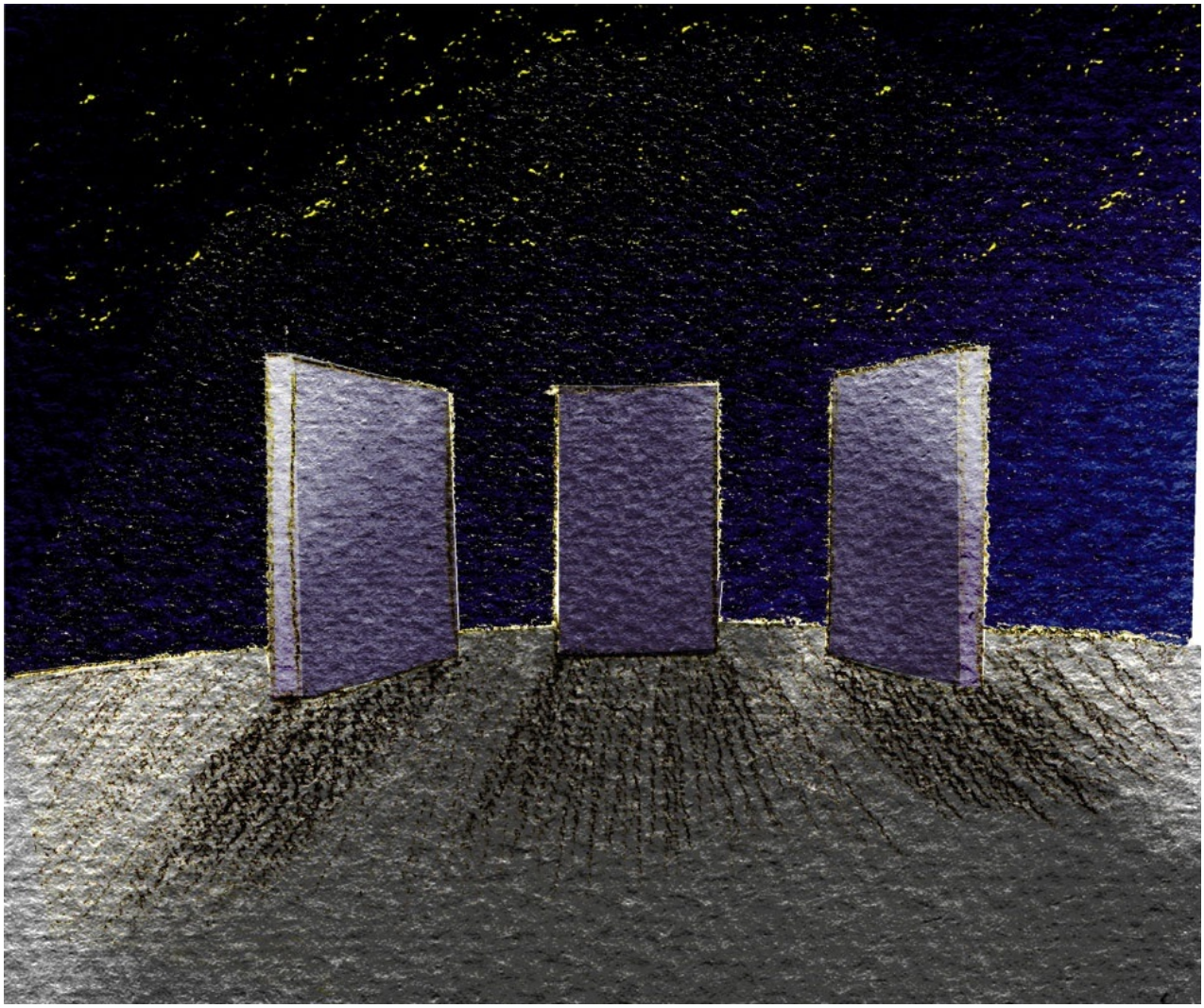
300年後も、わらっていいとも！

作者：土鳩ブックス

概要：text: nishiibe　illust: onoe



ニュース番組が終わったあとＣＭを挟んで時報が正午を告げると、テレビ画面には3体のモノリスが映し出される。モノリスの背後を水平方向に伸びる緩やかな曲線は、この惑星の地平線である。

夥しい数の星がひしめく空と、ざらついた灰色の地面が延々続く大地と、3体のモノリス。その映像が十数秒間、無音で流れた後、カメラは真ん中のモノリスの斜め上空に向かってズームインしはじめる。その先には地球がある。

最初は豆粒ほどに見えた青い星が、高速ズームによって徐々に大きくなっていき、やがて画面いっぱいに北半球が広がる。ユーラシア大陸の真ん中あたりに向かってさらにカメラが寄ると、雪で覆われた白い山々と、茶褐色の大地が見えてくる。

チベット、ラサから東に500キロほどの地点。牧草地の草を食むヤクの姿が見える。空の青を水面に映す大きな湖が見える。そして、湖のほとりに一本、巨大な柏の木が生えているのが見える。この柏の木が、タモリである。

「笑っていいとも！」は、20世紀の終わり頃から現在まで、300年以上にわたり放送され続けてきた超長寿番組だ。

1982年に番組が開始されて間もなく人気番組になった「いいとも！」は、その後も高視聴率を長いこと維持し続け、いつしか日本中どこを探しても知らない人は誰もいないというほど超有名なテレビ番組になった。お昼に「いいとも！」を観るという習慣が日本人の生活サイクルの中に新たに組み込まれ、そして定着していった。

人々はやがて、無意識下の行動として、正午になるとチャンネルを8にあわせるようになった。呼吸をするとき、人間はいちいちそれを意識をせずに行うけれど、それと同じようなことだ。もはや、正午だからチャンネルを8にあわせるのか、チャンネルを8にあわせたから正午になったか、その因果関係を認識することすら、人々にはできなくなっていった。

「お昼の顔」として親しまれた司会のタモリは、番組の急成長とともにその存在感を増し、いつしか 「昼」 または「昼的なるもの」を象徴するシンボルとして、あるいは「世界に昼をもたらす者」として捉えられるようになった。そこから派生して、たとえば青森や北海道などの東北地方では、タモリは「太陽の使い」、あるいは「太陽そのもの」とも考えらるようになったという。

また、それとは全く逆に、例えば私の遠い遠いご先祖様が住んでいた屋久島なんかでは、タモリは「闇」の象徴として捉えられることもしばしばあったらしい。（恐らくそれは、タモリがサングラスをかけていたことと、何かしら関係してると思われるが、それについてはここでは深く追求しないでおこう）

タモリの死後、一度だけ番組の打ち切り案が持ち上がったことがある。テレビ番組として、歴史上類を見ないほど大きな成功を収めた「いいとも！」にとって、達成すべき新たな目標はもはやそれ以上見つからなかったし、どの道いつか終わりにするのであれば、タモリの死は引き際のタイミングとしては適切だろうと考えられたからだ。

だけど、「いいとも！」は終わらなかった。「いいとも！」はその頃にはもう、日本人の意識の深層に通底するある種神話的な物語として機能しており、番組を終わらせることは、日本人の民族としての結束を弱め国力を衰退させることに繋がりかねないと危惧されたからだ。そんな理由もあって、「いいとも！」はタモリに代わる新たな主人公をスタジオにむかえ、”物語の続き”を紡ぎはじめた。

タモリの代替として最初にステージに立ったのは、タモリのそっくりさんであった。顔やシルエットが似てるだけじゃなく、声帯模写を完璧に体得したレベルの高いそっくりさんだった。サングラスもちゃんと同じブランドのものをかけた。だけど、姿形やしゃべり方がどれだけ似ていても、国民は納得してくれなかった。感性や思考のパターンが本物のタモリとは全くかけ離れていたからだ。

そこでそれ以降は、アンドロイドが投入された。過去のタモリの発言や、ふとしたしぐさに至るあらゆるデータをもとに、何度も再設計、バージョンアップがなされ、最終的には見た目の精巧さは当然のことながら、本物のタモリがもし生きていたらきっとしたであろう挙動や言動を実現できるまでに完成度を高めた。新しいギャグだって生まれた。

だけどそれでも、お茶の間にタモリが戻ってきたという実感を人々が得ることは、どうしてもできなかった。その要因は、クオリアの不在にあると主張する学者もいれば、サングラスの紫外線遮断率に問題があるというブロガーもいた。でも結局、そのラストワンマイルを解決することは、当時の文明レベルでは不可能だった。

そんなふうにして、試行錯誤を繰り返しながら「いいとも！」はその後もずっと続いたけれど、そこにはもう、タモリはいなかった。それはすでに失われてしまっていた。日本の中心に、ぽっかりと大きな穴が空いてしまったみたいだ、とみんなが思った。

そうして人々の心の時計の針は、11時59分を指したままぴたりと止まってしまったのだ。

それから 100年以上たった2150年。その頃には、人類はテラフォーミングされた様々な惑星に移住して暮らしていた。その惑星で生まれ、その惑星で育ち、地球を一度も訪れたことがないという日本人の血を継ぐ若者も増えた。国籍はもはや形骸化された概念に過ぎなかったけど、それでも日本民族の末裔である彼らは、相変わらず正午になれば皆いっせいにチャンネルを8に合わせ、「笑っていいとも！」を観ていた。

洗濯物をたたむ主婦も、会議室でプレゼンする会社員も、敵地にパラシュートで降下する軍人でさえ、正午になれば皆いっせいに手を休めチャンネルを8にして「笑っていいとも！」を観た。
その年、火星で開催されたサッカーワールドカップの日本対デンマーク戦では、0-0のまま延長戦を終え、迎えたPK戦にて、日本のゴールキーパー Kawa-guchi が、デンマークの放った五本のシュート全てを 「いいとも！」 を観ていたせいで防げなかった。それにより日本代表は念願だった初のベスト4入りを逃した。

彼らが観ていた「いいとも！」には、もちろん本物のタモリは出ていなかったし、彼らの多くは、その昔タモリという人間が実在したという事実さえ知らなかった。だから当然、かつてタモリの死が日本全体に途方もなく大きな悲しみと、癒やしようのない喪失感をもたらしたということも知らなかった。

ただ、「自分たちの中には決定的に欠けた何かがあるらしい」 ということと、そして 「その何かを再び取り戻すための鍵（キー）は、どうやら正午の8チャンネルに隠されているらしい」ということ、それだけは直感的に分かっていた。長い歴史のなかで日本人の普遍的無意識の深層に刻まれていった刻印が、そのことを教えていた。だから、彼らは愚直ともいえる態度でもって 「いいとも！」 をいつまでも見続けたのだ。それは、祈りにも似た行為だった。

事態が新たな局面を迎えたのは、それからさらに160年先の2310年。

3月。イギリス出身の著名なスピリチュアリストが、驚くべき発表をした。チベットの三大聖湖のひとつパソンツォのほとりの神木に、タモリの魂が宿っているというのだ。そのニュースを知って、半信半疑ながらも真っ先に確認のため現地を訪れたテラ・フジテレビスタッフと、笑福亭プロクシマは、その柏の木を前にして思わず泣き崩れた。その存在性は、まさにタモリそのものだったからだ。テラ・フジテレビはその後、拠点をALTAからチベットに移し、タモリのいるパソンツォ湖から「いいとも！」を放送することにした。

偶然にも （それは決して偶然などではなく、必然だったのかもしれないが） 同じ時期に、別の惑星で3体のモノリスが発見された。アカシック・ウィキペディアによれば、モノリスの基本的な役割とは 「ある生物の劇的な進化を促すこと、またはそれを滅ぼすこと」 だとされているが、この3体のモノリスの役割は、日本民族を次の進化の段階へ導くことだった。テラ・フジテレビは、この3体のモノリスこそ新しい 「いいとも青年隊」 に相応しいと考え、番組のオープニングに起用した。
3体のモノリス（いいとも青年隊）ではじまり、つづいてチベットの柏の木（タモリ）が登場するという構成の、お昼12時のテレビ番組としてはかなり斬新なオープニングだった。

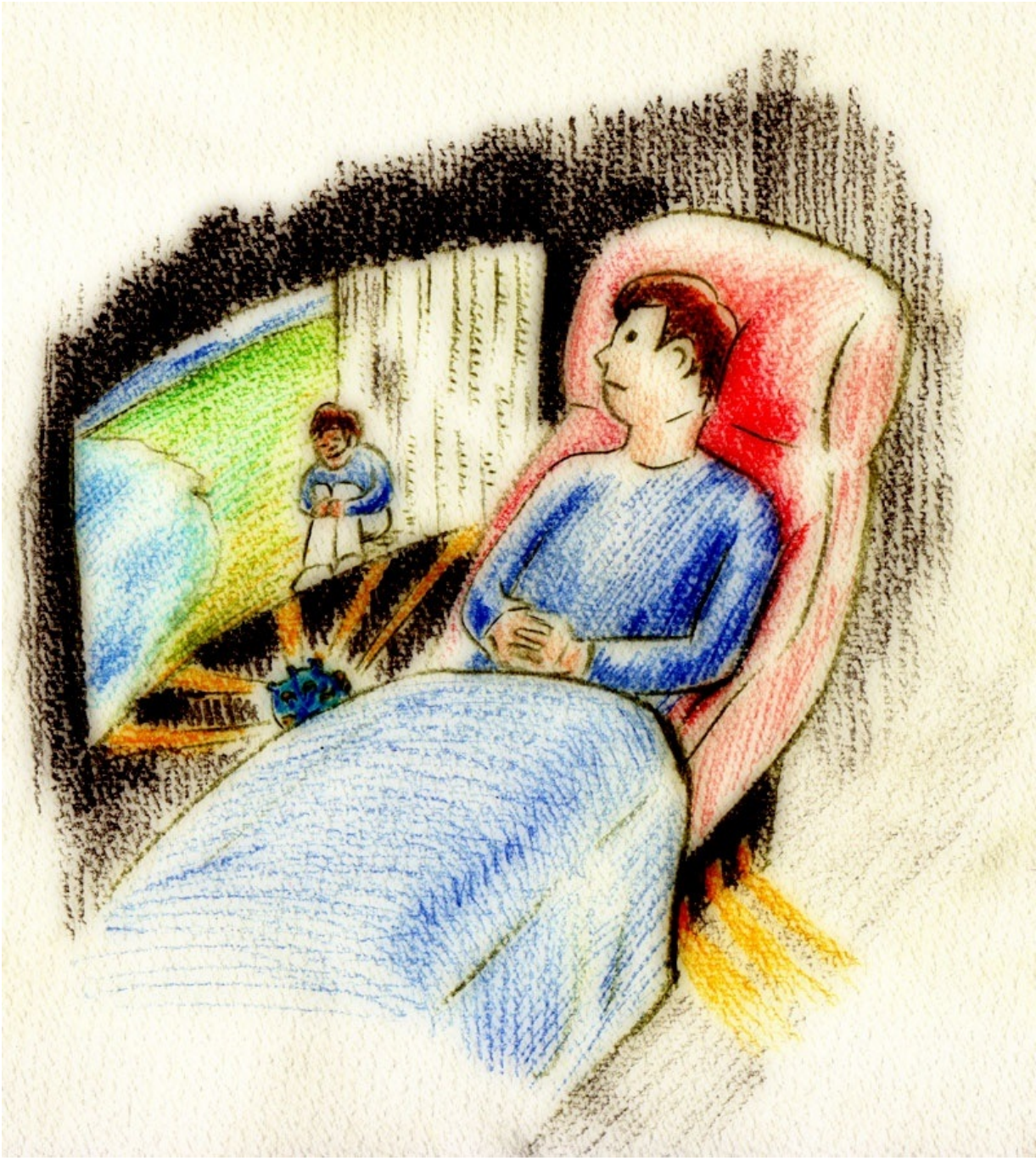
タモリのスピリットを宿すチベットのその柏の木が、はじめて映像として世界に配信された日、すべての日本人の血を継ぐ者達は涙した。当然、物質としては一本の柏の木に過ぎないタモリは、番組中ひとことも話さなかったけど、それでも一向にかまわなかった。日本人はそこにタモリの姿を見出し、自らのルーツを感じ取った。

11時59分のまま止まってしまっていた時計が、ようやく未来に向かって時を刻みはじめた。

気象庁が関東地方の梅雨入りを発表した6月初旬。

わたしは、太陽系外惑星グリーゼ581cから、グリーゼ581dへ向かうシャトルのシートに体をうずめ眠っていたところを、客室乗務員にそっと起こされた。正午になったのだ。横では妻が小さな寝息をたてて寝ている。彼女のお腹には来年の春生まれるわたしたちの子供がいる。わたしはチャンネルを8に合わせる。

3体のモノリスが画面に映し出される。それから地球、ユーラシア大陸、チベット、パソンツォ湖とズームして、湖のほとりの柏の木を真上からとらえた映像が流れたところで画面は切り替わる。今度は正面からのカット。柏の木が風に静かに揺れている。

テレホンショッキングがはじまる。柏の木の根元には、一人の青年。今日のゲストである彼は、私のクローンだ。

text: nishiibe
illust: onoe